

江戸のにせ判じもん

昔、あったてんがな。

江戸ね、^{たいへん}ごうぎ身上のよい大家があったと。あるとき、その家の大掃除があって、何時も出入りしているとつあも手伝いにいったと。一日中、バタバタして終わって、家に戻って風呂に入っていたら、大事な品物しまうのを忘れてきてしもた。かかに、

「かか、かか、今日大家の家に掃除にあって、流しの水船の中に、金の徳利入れたまんま、忘れてきてしもうた。いまごろ旦那の内じゃ、大騒ぎだろうが、いまさら、忘れたなんて言うのも具合が悪いしな」というているどこへ、大家の使いが来て、

「今日の大掃除にだいじな金の徳利がどっかに行ったがお前知らんか」と聞くんだんが、

「おら、^{すこしも}ずっでい、知らん」と答えた。使いは「そんげのこというても、なんせ、すぐ来てみてくれ」といわしゃったと。とつあは、はておごつた。行っても困るし、行がんでも困る。と思うていると、かかがこっそりと

「いいことお前に聞かせてやる。これから大家に行つてソロバン一丁貸してろて、珠をあつちへやったり、こつちへやったりして『その徳利は流しの方にある』とソロバンにかずけて^{せいに}言うたらいいこて」とおせてくれたんだんが、そろばんの珠をばちばち弾いて「金の徳利は流しの方にあると出た。流しのどこにあるかな。待て待て」とまたソロバンをパチパチして、「うん、わかった。流しの水船の中と出た」というんだんが、その通りにあつたと。みんながたまげたと。ほうして旦那様が褒美に銭をくれたと。

このとき、この家ね、大阪の鴻池という大金持の番頭が使いに来て泊まっていたと。このとつあ判じもんを見てたまげたと。

「さて、さて、お前さんのごうぎな判じもんにはおらもたまげてしもうた。実は、大阪の鴻の池のお嬢様が三年先から病気で、どの医者にかかっても治らん。ほとほと困っているとこだ。お前様ほどの判じ名人ならきつと治ると思うが、判じてくださるようお願いします。

すぐおらと一緒に大阪に来ていただきたい」とつあは、^{たいへん}これまたおおごつたねか、と思うたども、いやだともいわんね。

家に来て、かかにこの事を口説くとかかが、「何困ることがあろうば。大阪の鴻の池というたら、誰知らぬもののない大金持ちだ。お嬢さんの病気の判じもんが当たれば、お礼の銭だつてちつとやそつとでないことんし」とかかが威勢付けたんだんが、とつあもその気になった大阪へいぐことにした。

番頭と二人で大阪に向かった。その途中で、番頭の泊まり付けの旅籠や泊まった。ところ

が、その旅籠やは、大騒ぎだったてんがな。旅籠屋のかかに「ここんちは、何があったんだい」と聞くと、「それが、よんべな、泊り客の金五十両をだれか盗んだもんがあつて、おやじはお上につれていがれたんだんが、心配で心配でまんまものどへ通らん」と、かかがいうんだんが、番頭が

「そうかの。それは大変だ。この連れの人、江戸の判じもんの名人で、どっかへめえなくなつたもんなんか、^{すく}そんま見つける人だ。この人から判じもんしてもらふといい」というたと。とつあは、旅籠屋のかかに頼まれて、それくっさ、今さらいやといわれん。こんやこっそり逃げ出そうと腹をきめたてんが。

「それでは見させてもらいます。どうか奥の間に一人で置いてください。おれが呼ぶまで誰も来ないように。それから、判じもんに使いたいんだが、ソロバン二丁と銭五両、焼き飯三つ、わらじに二足持ってきてくんねか」とすっかり逃げ支度して奥の間に入った。夜中に一人でこっそり逃げようと待っていた。ところが夜中になると、誰か、ミシン、ミシンと、しのび足で部屋に近づいてくるもんがある。

「判じやさん、お願いに来ましたが、起きてくんない」と呼ぶんだんが、起きて見たれば、若い女だったと。

「判じ屋さん。お客の五十両を盗んだのは、おらでござんす。おらは、ここのおんなごで近頃、親の病気が悪うなって死にそうだし家へ帰ってこいと、親もとから手紙がくるが、いくら主人に頼んでも家へやってくんない。それで悪いとは承知して、お客の金をとって、家へ行くつもりだった。それが、こんげの騒ぎになって家へ行くこともならん。五十両は、去年の大風で、おいなり様の屋根が壊れて、そのまんまになっているが、その屋根に隠しておいた。それで、どうかお前様にお願ひがある。おらが金盗んだことはわかっているにきまっている。どうか、おらを助けると思つて、おらを盗人にしないで貰いたい」と泣き泣き頼んだがんだと。

「聞けば、気の毒な事情だすけね、お前の言う通りにしてやるが、よしよし、俺にまかしておけ。お前、家へ行きたけや、この五両と焼きめしとわらじをやる」と言うて、んな、おんなごにくれた。

翌朝、旅籠屋のかかを奥に呼んで、そろばんをパチパチして、「この家には、おいなり様の堂があるな」「ハイ、左様で」「去年大風が吹いて、屋根がこわれたな」「ハイ、左様で」「そのぼっこれ屋根は、そのまんまにしてあるな」「ハイ、左様で」「そのぼっこれ屋根に五十両が隠してある。屋根を直さんすけね、おいなり様がお客の五十両持って行がれたんだ。早く屋根を直せ、というお告げだ」

そこで、おいなり様へ行って見たれば、言う通りに、ぼっこれ屋根の所に、五十両がそっくりあつた。ほうして、旅籠屋から、礼の金をいっぱい貰うた。

それから旅をつづけて、大阪の鴻の池にいよいよ着いた。番頭は、「このお方は、判じもん

の名人で、お嬢さんの病気を見てもろうと思うて、江戸からお連れした」と、いろいろ話したれば、主人は、「それはありがたい。どうかお願いします。それにしても今夜はお疲れのこととございましょうから、静かな奥の部屋で、ゆっくり休んでいただきたい」ということで、奥の部屋に寝たが、これからの先きことを考えると、^{しんぼいで}あじことで眠ることもならん。体は疲れているし、うつらうつらしていると、あの旅籠屋の、おいなり様が現われて、「先日は、汝のおかげで、ぽっこれ屋根が直されて、りっぱな堂様になって、まことにありがたかった。おかげで、急にお参りするもんが多うなり、あげもんも多くなった。ついではそのお礼に、鴻の池の判じもんを聞かしてやる。病人の寝ているどこの、縁の下の泥を三尺掘ると、あみだ如来様の像が埋まっている。それを掘り出して、きれいな座敷に安置すれば、直ちに病気がなおる」と言うたかと思うと、もう姿がなかった。

翌朝、鴻の池の旦那を呼んで、またそろばんをパチパチやって、いなりさまの言う通りのことをいうと、果してべとの中から、如来様が掘り出され、それを安置したら、たちまち病人は全快した。ほうして、とつつあは、米と金を山のように積んだ大八車と共に送られて、喜んで江戸へ帰った。かかも喜んで、一生安楽に暮した。これでいきがポーンとさけた。